エドモントン便り

松茸狩り

藤永　茂

秋の訪れをひそかに願う気持が、今年は我々の心の中にあったかもしれない。それは、大きくふくらんだ、松茸狩りへの期待であった。数年まえから、お隣りのブリティッシュ・コロンビア州のあちこちで松茸がどっさり取れるという話は耳にしていたが、実際に見事な松茸を人さまから戴いたのは一昨年のことだった。それが昨年には、アルバータ大学の若い日本人の方々がカナディアン・ロッキーの最高峰マウント・ロブスンの近くで、大きな段ボール箱に幾箱もの松茸を収穫して意気揚々とエドモントンに帰り、私どもまで、たっぷりとおすそ分けにあずかったのだった。

しかも、今年は、その同じ場所まで私どもを案内して下さるとのことで、家内も私も共々に、風の音がたしかな秋の到来を告げる日を、心待ちにしていたのである。

九月の中ばの週末、九名からなる松茸狩りの一隊は、苦手の朝起きをものともせず、三台の車に分乗してエドモントンを出発して西へ向った。目的地はマウント・ロブスンの西南にあるヴェイルマウントという小さな町であった。昨年の秋、その町の北のはずれの砂地をおおう松林の中で、見事な松茸を一人で十本、二十本と見つけたというのである。

町のモテルに部屋をとると、早速その松林に出かけることになった。近くの山並みの中腹には、かなりの規模の山火事の煙が望見された。

はやる気持を押さえながら踏みこんで行った松林の立木の大部分は、ロッジ・ポール・パインという松の木だった。丈高く、まっすぐに天に向ってのびる松の木である。松茸が周りに生えるのは、その松ではなく、やはり日本の赤松に似た松の木だという話であったが、新米の私には、その辺の区別の見当もつきかねた。しかし、経験者たちが、いちはやく感じ取った凶兆は、昨年にくらべて今年は地面がいやに乾いているということだった。どうやら、このあたりの今年の夏の雨量は僅かなものであったらしい。三台の車のトランクに、大きな段ボール箱をいくつも押し込んで乗り入れたまではよかったが、豊かな収穫の夢は、みるみるしぼんでいった。やがて、夕陽がロッジ・ポール・パインの梢をもれる頃になっても、ただ一本の松茸も見つからない。野外での焼き松茸の饗宴用に酢醤油まで用意しての遠征（片道四百キロ！）であったのに……。

しかし、手ぶらのままで松林の中を右往左往する人びとの表情もムードも、意外とほがらかだった。いや、十分に楽しかった。これで大きな松茸がとり放題にでもなろうものなら、楽しすぎたかもしれない。

結局の所、ただの一本もとれなかったが、それでも、台所つきのモテルの大きな一室に九人みんな揃っての夕食は、限りなく楽しかった。ビール、ワイン、松茸が入るはずだった牛肉しゃぶしゃぶ、松茸ぬきの松茸ごはん……。

真夜中近く、戸外のひんやりとした秋の空気に身をさらしながら、自分たちの部屋に戻る途中で望み見た山並みには、山火事の火は見えず、ただその黒いシルエットが夜空をくっきりと切っていた。

カナダの夏は山火事の季節でもある。夏の間は毎年山火事のことがニュースになる。カナダに来たはじめの頃は、「現在いくつの山火事が out of control」というニュースを聞いて、これは大変、と思ったものだったが、要するに人間の手が回りかねているという位の意味の場合が多いとわかると、「なあんだ」という事になった。今年の夏は、件数約三五〇、焼失面積約三二〇万エーカー。これは北海道の面積の約六分の一である。カナダの山火事の大部分は落雷による自然発火がその原因だそうだから、太古の昔から、五、六年でわが北海道全体がまるまる焼け跡になるような割合いで山火事があったのだろう。

バンフ国立公園の西に連らなるクーテネー国立公園内で一九六八年に落雷による山火事があり、六千エーカーの森林が焼失した。その直後にたまたま現地を訪れた私たち一家は、まだ煙にくすぶるハイウェイを西へ抜けたあたりで、やたらに熊に出会ったものであった。火事を逃れて移動していたのであろう。

今年の夏、久しぶりにその山火事の場所を訪れた。焼け跡を通るハイキング・コースをたどってみると、まだ沢山の焼けた木がそのままになっていたが、そのあたりに数知れぬロッジ・ポール・パインの若木が、すくすくと青い空に向けて成長していた。もう我々の背丈よりはるかに高くなっている。その焼け跡の山の斜面は、ファイヤ・ウィードと呼ばれる草の紅紫色の花で美しく一面に埋められていた。　松林の中で、まぼろしの松茸を求めてさまよいながら、私は、ふと、まわりの木々たちに話しかけてみたいような気持になった。大きな自然のふところの中にいだかれているという快い安らぎが、私の胸にあった。

松茸こそ見つからなかったが、私たちは松の林の中で、もっと貴重なものを見たのではなかったか。だからこそ、松茸ぬきのささやかな夕食のひとときが、我々すべてを心あたたかき善人たちばかりに変えてしまったのであったろう。

（エドモントン大学教授）